

新刊紹介



マスコミ・文化 九条の会所沢編

『坂本修弁護士に聞く～憲法をめぐるせめぎ合い』

今井 文夫

憲法闘争への熱いメッセージ

本書は、改憲手続き法案とのたたかひの段階から福田内閣の成立までの時期、「マスコミ・文化九条の会 所沢」の坂本修前自由法曹団団長への4度にわたるインタビューをまとめたものである。

憲法をめぐるのは激しく動いている。構造改革と改憲路線に対する国民の批判の高まり、改憲を参議院選挙公約の第一に掲げた安倍内閣・自民党の歴史的敗北、安倍首相のぶざまな政権投げだしと福田政権の成立、“驚天動地”の福田・小沢会談による海外派兵を中心課題とした大連立の合意とその破綻など、めまぐるしくかつ大きな動きとなっている。

憲法闘争を今後発展させていくにあたって、憲法をめぐる情勢を的確に把握し確信を持って運動を進めることが不可欠だが、本書は「新しい情勢にふさわしい活動を私たちも用意する必要がある」（巻頭文）との問題意識で発行されており、まさに運動が求める要請に正面から応えるものとなっている。

インタビューの時期は福田・小沢会談の前までだが、小沢のISAF（アフガニスタン国際支援部隊）へ

の参加の主張の危険性や「米日支配層の様々な『工作』の下で、自民党と民主党の間に9条改憲について妥協・修正が成立して改憲発議の一本化という改憲連合が実現する危険はけっして軽視できません」との指摘があり、大連立構想すら予見するものとなっている。

「開かれた情勢を生かすために」との第2章では、課題として、戦争協力法や改憲審議の阻止のたたかひとともに、要求運動と憲法改悪反対のたたかひとの結合の重要性が指摘されている。

第3章では、「共同を広げる不可欠の課題として、憲法とは何か、その価値、生命力をどう見るかをつかみ直して語り合うことが大事」「勝利のための戦略課題」と提起されている。日本国憲法を改めて学び議論することが、憲法闘争をより懐深いものにし、共感と共同を広げる力となる、言わば“日本国憲法の生命力”を発揮させる取り組みとして強調されている。

第4章の「自由法曹団とともに」では、改憲阻止は「団と全団員の存在意義をかけての不動の決意」と語られるとともに、参議院選挙直後に開催された自由法曹団の憲法闘争の総括集会の議論でまとめられた8項目の具体的な行動は、改憲を阻止するためには労を厭わず求められたことをやり尽くすとの自由法曹団そして坂本さんの熱いメッセージとなっている。このような法律専門家集団を日本の憲法闘争が擁していることは力強い限りである。

憲法闘争を担うみなさんに本書の一読をお勧めしたい。

（連合通信社発行・2007年11月・500円）

（いまい ふみお・全労連国民運動局長）